

# 理解する (verstehen understanding) について

## —ウィトゲンシュタインの後期哲学における考察—

橋本 哲 (元名古屋大学)

### はじめに

理解するという語は、多様な場面で使われる<sup>1)</sup>。しかし、理解するという語が使用される場面が多様であっても、そこには「理解する」という共通の心的出来事、心の働きがある、だから「理解する」という語が用いられていると思われるかもしれない。

これに対してウィトゲンシュタインは、「理解する」ということに特定の特徴的な心的出来事、心の働きはない、と言う。

本稿では、「理解する」ということについてのウィトゲンシュタインのこの考えを、具体的な事例を通じて検討する。

第1節では語(記号)が効果を生むのは語を理解するという心の働きがあるからだ、という考えが生まれる事例について、第2節では語(記号)を理解するというのはその語に付随するイメージや感じを持つことだという考えに対する批判について、第3節では語や文を理解する際に実際に何を行っているかについて、第4節では理解することに特定の特徴的な心的出来事、心の働きというものは無いということについて、第5節では語を理解するということは言語における語の慣用にあることについて、第6節では理解するということはある種の心の状態であることについて、第7節では理解するとはどのようなことかについて、論じる。

### 1. 語(記号)が効果を生むのは語を理解するという心の働きがあるからだ、という考えが生まれる事例

「理解する」という語は、例えば「命令を理解する」について言えば、命令(それは語や文からなっている。)を「理解する」という何らかの心的出来事、心の働きを表しているように見える。最も素朴な映像は、ある語(記号)が与えられても語のままでは死んでいる、そのままではどういう働きもしない。その語を理解するという心の働きによって、語は生命(意味)を持ち、語の効果が表れる、というものであろう。理解するという心的出来事、心の働きがないと、語は語のまま、どういう効果も生み出さない、という映像である。

言語の働きと結びついたあるはっきりした心的出来事(mental processes)<sup>2)</sup>があって、この出来事を通してのみ言語は機能することができるように思われる。その出来事とは、理解し、意味する出来事のことを、私は意味している。我々の言語の記号は、こうした心的出来事がないと死んでいるように見える。そして、記号の唯一の機能がそうした出来事を誘導することであり、そうした出来事にこそ我々が関心を持つべきものであるように見える。(BB p.3、強調はウィトゲンシュタイン)<sup>3)</sup>

理解についていくつか例をあげよう。

- ① ある暗号文と、それを解読する表が与えられている。私は、その表に照らし合わせて、暗号文を日本語に置きなおしていく。そして、その全てを日本語に置きなおすと、その暗号文は「5月1日に〇〇作戦を決行する。」という日本語の文になったとしよう。この日本文を読めば、私はしかるべき状況の中では、それだけで十分にこの文の意味を理解できるだろう。そして私は、この暗号文に書かれていることを遂行するために行動を起こすなり、その内容を他の関係者に伝達、指示をするだろう。ここには、暗号文とそれを理解するという事例がある。
- ② 「庭にある赤い花を取ってこい。」という命令があったとしよう。この命令に従うことができるためには、その前にその命令を理解するという心の働きがなければならぬ、と考える。そうした心の働きがなければ、命令を受けても、私は何をすべきなのか分からないだろうから、と。
- ③ 日本語のおぼつかない外国人と話をしている。始めは何を言っているのか分からなかったが、あれこれやりとりしているうちに相手の言っていることが分かった(理解した)、ということがある。この「分かった」は、求められれば自分の理解した内容を説明できるということであり、理解に対する確信の表明である。ここには「理解する」という心の働きがあるように見える。

以上の例は、語や文はそれだけでは単なる文字、記号に過ぎない、語という記号に意味を与える(理解する)という心の働きがないと語は機能しない、と言っているように見える。どの語(記号)もそれだけでは死んでいる、そうした死んでいる語(記号)に生命(意

味)を与えるものこそ、理解するという心の働きだ、と言っているように見える。このことをウイトゲンシュタインは次のように言う。

我々は、言語の働きが2つの部分からなっていると考えがちである。一つは記号を操作する非有機的部分であり、今一つは我々が記号を理解する、記号を意味する、記号を解釈する、思考すると呼ぶことのできよう有機的部分である。(BB p.3、強調は論者) 4)

我々は、言語の働きは、語(記号)を操作する非有機的部分と、語を理解する、意味する等の有機的部分(心の働き、心的出来事)の二本立てから成っていると考えがちだと、ウイトゲンシュタインは言う。

では、語(記号)を理解する、語を意味する等の有機的部分(心の働き、心的出来事)とは、どういうものか。次節でこのことを取り上げよう。

## 2. 語(記号)を理解するというはその語に付随するイメージや感じを持つことだという考えに対する批判

語を「理解する」というとき、我々は、その語に伴うイメージや語の感じを持つことが、その語の意味を理解することだと考えがちだ。ウイトゲンシュタインは、語を「理解する」ということは、その語の概念、映像(イメージ)を精神の中に持つことだということを、次のように説明する。

誰かが見本を見せて「この色は<青>と呼ばれており、この色は<緑>……」と言って、私に色の名前を説明する時、この場合は、多くの点で、彼が私に色見本の下に言葉が書いてある一覧表を手渡す場合と比較することができる。—この比較が色々な点で人を惑わしうるものだとしても—一人は今やこの比較を拡張する傾向がある。説明を理解するということは、説明されたものの概念を精神の中に所有することを意味する。それはすなわち、ある見本や映像[イメージ]を所有することだ、と。人が私に今、様々な木の葉を見せて、「これを人は<葉>と呼ぶ」と言ったとすると、私は葉の形という概念、葉の形の映像を精神の中に受け取る。(PI §73、強調はウイトゲンシュタイ

ン、[ ]は論者の挿入である。以下同じ)

しかしウィトゲンシュタインは、このような説明に対して、続けて次のように批判する。

しかし、その時、一定の形を示すことなく<全ての葉の形に共通する>葉の映像とは、どのように見えるのだろうか。一緑のあらゆる色合いに共通する見本である一緑色の<私の精神内にある見本>は、どのような色合いを持っているのだろうか。(PI § 73)

実際、机や犬、走るや食べるといった普通名詞や動詞等には、イメージを伴うものが多い。漠然とはしているが、ウサギといえば白いウサギのイメージだろうし、走るといえばジョギングしている姿だろうか。

語の意味を理解するということは、結局、その語に付随した何らかのイメージや感じを持つことのように見える。

だが、一つの語に何がしかのイメージが伴うとしても、その語には沢山の適用例がある。そのあらゆる適用例のどれにも当てはまるイメージというものがあるだろうか。あるとすれば、それはどんなイメージだろうか。ウィトゲンシュタインが問うように、全ての葉に共通する葉のイメージ(映像)、緑のあらゆる色合いに共通する緑色の色合いとはどういうものか。それを示すことは難しいだろう。

このようにウィトゲンシュタインは、語に伴うイメージがその語の意味であり、そのイメージを持つことがその語を理解することだ、という考えを批判する。

また彼は、語を使う時に、その語に伴う特定の感じについて次のように言う。

ウィリアム・ジェームズは、「そして」、「もし」、「または」のような語の使用に伴う特定の感じ (specific feeling) について語っている。そして少なくともある種の振舞いが、そのような語にしばしば結びついていることは疑いない。「そして」にはものを集めるような身振り、「でない」には退けるような身振りが。そして、明らかにこれらの振舞いに結びついた視覚的で筋肉感覚的な感覚がある。他方、これらの感覚は、あらゆる「でない」と「そして」の語の使用に必ず伴うものではないことも全く明らかである。

もしある言語において、「しかし」が英語の「でない」の意味を持つとしても、この二つの語の意味はそれらの語が生み出す感覚を比較するのでないことは明らかである。

「リンゴとそしてナシを僕に与えよ、そして部屋から出て行け。」と私が言った時、二つの「そして」という語を発音した際に、私は同じ感じがするだろうか、と自問してみよ。(BB §1 の 1、最初の強調は論者、後の 2 か所の強調はウイトゲンシュタイン)<sup>5)</sup>

人は、「もし」という語を発していない時に、もしー感覚(Wenn-Empfindung, if-feeling)を持つだろうか。(RPPI §335)

ウイトゲンシュタインが問うように、「もし」という語を発した時の「もし」に伴う特定の感じ(もしー感覚)は、「もし」という語と切り離して持つことはできない。かといって、「もし」という感じがいつも「もし」という語に伴っているわけでもない。「もし」の感じを持つこと無しに「もし」を語ることができるからだ。従って、「もし」という語を発した時のそれに伴う特定の感じが「もし」という語の意味だということにはならない。このことは「そして」や「でない」という語についても同様だ。

かくしてウイトゲンシュタインは、語の意味はその語を聞いたり発したりする際の経験(イメージや感じ)ではないと、次のように言う。

意味は、語を聞いたり発したりする際の経験 (Erlebnis, experience) [イメージや感じ] ではないし、文の意義 (Sinn, sense) はそのような経験の複合体ではない。(「私はまだ彼に会ったことがない」という文の意義はどのようにしてそれぞれの語の意味 (Bedeutung, meaning) から成るのか。) 文は語から構成される、それで十分なのだ。(PI vi) <sup>6)</sup>

例えば、「ここに 1000 角形と 999 角形の図形があるとしてみよ。」と言ったとしよう。この文を言うとき、「1000 角形」、「999 角形」等それぞれの語に、いつも必ず特定のイメージが伴っているだろうか。仮に何らかのイメージが伴っていたとして、その場合、1000 角形のイメージと、999 角形のイメージとで違っているだろうか。それらのイメージは、どちらも限りなく円に近いぼやけたもので、区別できないのではないだろうか。

しかし、「1000 角形」と言った時、自分は確かに 1000 角形をイメージしていた、と言われるかもしれない。でないと 1000 角形という語が理解できない、と。では、そこでイメージされた 1000 角形が確かに 1000 角形のイメージだということがどうして確信できるのか、と問われたらどうだろうか。それを確信するために、「1000 角形」と言った時にイメージした 1000 角形が確かに 1000 角形のイメージであることを根拠付けるために、もう一つ別の 1000 角形のイメージが必要になるのではないか。すると、これは無限後退に陥ってしまう。<sup>7)</sup>従って、その確信は途中のどこかで終わる必要がある。ということは、その終わるところが、最初に「1000 角形」と言う時のイメージでも良いということになる。更には、最初に「1000 角形」と言う時に、イメージ抜きでそう言うこともあるだろう。すると、1000 角形という語の意味を理解するにはイメージ抜き、語だけで十分だ、ということになる。

また、「ここに」、「これ」、「おそらく」、「今日」、「してみよ」という語には伴うイメージはないのではないか。

このように、語を使う時にはいつも必ずその語に対応するイメージが伴うということではない。従って、語のもたらすイメージがその語の意味だということにはならない。

以上のようにウィトゲンシュタインは、語の意味は、その語を聞いたり発したりする際の経験（イメージや感じ）だ、という考えを否定する。

しかし、語に伴うイメージや感じがその語の意味でないとすると、語はそれだけでは単なる記号にしかすぎない。だから、語の意味を「イメージ抜き、感じ抜き」で理解するには、それを理解するという何らかの心的出来事、心の働きがなければならぬのではないか。そうした心の働きがないと、語は単なる記号のまま、どのような効果(意味)も生み出さないのではないか、と思われるだろう。

そこで我々は、語や文を理解したり判断したりする際に、実際には何を行っているか、そこでの心の働きとはどのようなものか、それを次節で考察しよう。

### 3. 語や文を理解する際に実際に何を行っているか

#### (1) 庭にある赤い花を取ってくる

「庭にある赤い花を取ってこい」という命令があったとして、その命令に従う事例をい

くつか考えてみよう。

以下は、ウィトゲンシュタインが『青色本』の中で掲げている事例<sup>8)</sup>をアレンジしたものである。

- ① 命令された「赤」という語に対応する赤の色見本を持って庭に出る。その色見本を庭にある花の一つ一つに当てて比較し、その色見本の色に一致すると思われる色の花を取ってくる。
- ② 命令された「赤」という語に対応する赤の色見本をじっと見る。そして、その色見本の赤色を記憶して、色見本を持たずに庭に出る。記憶の中の赤色のイメージに一致すると思われる色の花を取ってくる。
- ③ 色見本はなく、庭に出て、頭の中に赤いイメージを思い浮かべながら、どの花がそのイメージの色に一致しているか、あれこれの花と較べて、イメージした色と一致していると思われる花を取ってくる。
- ④ 庭に出て、周りを見渡し、ある花の所に近寄ってその花を取ってくる。その際、色見本とかイメージ等と比べることは一切しない。

これら4つの事例の中で、我々が普通そのようにするだろうと思われがちなのは、③ではないだろうか。赤い花を探すのに、①や②のように色見本を使うことは普通しない。さりとて、④のように、理由なく特定の色の花を選び取ることもできないように思われる。だから③だと思うのではないか。他の花ではなく、まさにその花を選び取った以上、その判断に理由（根拠）があるはずだと思われるからだ。

ところが、我々が赤い花を選び取る時に実際にしているやり方は、普通は④なのである。特殊な赤色の見本を示されて、その特殊な赤色と全く同じ色をした花を取ってくるように言われる場合は別として（この場合はおそらく①のように示された色見本を持っていくだろう。）。通常は、赤い花を取って来いと言われれば、特別何かをするということなく（色見本を持っていくとか何らかのイメージと比較するということなく）、赤い花を選び取ってくる。赤い花を探している時に、これはちょっとピンクっぽいかな、とか、どちらかといえば茶色かな、と思うことはあるかもしれない。だがその場合でも、何らかのイメージと比較せずに選んでいる。ざっと庭を見渡す、花を見つける、そしてそれを取ってくる、それだけのことが多いのである。

でもその時、どうしてそれが求められた赤い花だとあなたは判断した（選び取った）の

か、と聞かれると、実際には根拠なく選び取ったにもかかわらず、先の③のように答えてしまう。というのは、「どうして」と理由を問われると、理性の要請とでもいえるものによって、あるものを選び取った以上まさにそれを選び取った何らかの理由（根拠）があるはずで、それを示さねばならないように思われてしまうからだ。理由なく選んだとは答えづらいのである。だから、実際にはどんなイメージも持たずに選び取ったにもかかわらず、自分の赤いイメージに合っていたから選んだ等と、事実と異なる答えをしてしまうのである。これは事後の説明であって、選んだ時に実際にそうしていたことを説明するものではない。

あるいは、私はそのように赤いという言葉を使用する訓練を受け、言語教育を受けた、と答えることがあるかもしれない。しかしこの答えは、私がその花を選び取った原因を説明するものであって、理由（根拠）を説明するものではない。

また、「庭にある赤い花を取ってこい」という命令を受けて、相手が黄色い花を取ってきたとしよう。その場合我々は彼に対して、「彼は、赤いということで黄色いイメージを持ったのだ」とは考えない。「彼は、命令をちゃんと聞いていなかった」と思うことはあっても。

このように、「赤い花を取ってこい」という事例は、その命令を受けてそれを実行するには、その前にその命令を理解するという心の働きが必要だ、そして、そこでの心の働きというのは、何らかのイメージを持つことだ、という考えに対するウィトゲンシュタインの批判を明らかにする。

我々は「赤い花を取ってこい」という命令に対して、普通は色見本や赤色のイメージは勿論、どんなイメージも持たずに赤い花を選ぶ。ウィトゲンシュタインは、命令を理解するのにイメージを持つ等の心の働きが必ずしも必要ではないことを明らかにする。

## (2) 語や文を理解する理由や根拠には終わりがある

上記(1)の事例は、我々が、理解するという時に、そのように理解した理由や根拠(経験による正当化)には終わりがあることを示している。しかし、理由や根拠が底をついたにもかかわらず、どうしてそうしたかと問われると、理性の要請とでもいえるものによって、我々はそのように理解した理由(根拠)を更に探そうとする。理由や根拠の無い理解には、

何か決定的なものが欠けているように思われるからだ。そのため、それ以上の理由や根拠が無くても、実際に行っていたこととは別の説明（事後の説明）をする、あるいは原因を挙げることでそれが理由(根拠)であるかのように説明をする。

実際には、我々の理解の経験による正当化（理由や根拠）には終わりがある。

経験による正当化（*Rechtfertigung, justification*）には終わりがある。もし終わりが無かったら、[それは原因を挙げることによる説明であって、] 正当化ではないであろう。（*PI* § 485）

さて、命令があって、その命令に従うには、その前にその命令を理解するという心的出来事、心の働きがなければならない、そうでなければ命令に従うことはできない、という考えに戻ろう。

しかし、これまで見てきたように、命令を理解するには必ずしもイメージを持つ等の心の働きは必要なかった。

では、命令に従うという時、その命令を理解するという心の働きというものは、全くないのだろうか。もし命令を理解するという心の働きがないとしたら、命令に従うことなどできないのではないか。オウムはしゃべることができる。だが、オウムに何かを命じても期待する反応は返ってこない。それと同じことにならないだろうか。命令（語）を理解するという心の働きがないと、何もすることができないのではないか。そこで、語（命令）という記号を理解する際の心的出来事、心の働きとは実際にはどのようなものか、それを次節で考えてみよう。

#### 4. 理解することに特定の特徴的な心的出来事、心の働きというものは無い

命令があっても、命令自体は語という記号でしかない、記号である命令に従うためには、その前に、その語(記号)を理解するという心的出来事、心の働きがなければならない、と普通そのように我々は考える。ウィトゲンシュタインの想像上の対話者は次のように言う。

「命令とその実行の間には溝がある。それは理解することによって埋められなければならない。」

「理解することにおいて始めてそれは、我々が**これ**を行わなくてはならない、という意味になる。命令 —それは単なる音声、インクの線である。—」(PI § 431、太字と強調はウィトゲンシュタイン)

しかし、第2節で明らかにしたように、語の意味を理解するには、語に伴うイメージや感じを持つことがいつも必ず必要だということではなかった。また、第3節においても同様に、命令の内容を理解するためには、その命令に対応するイメージを持つことは必要ではなかった。従って、理解するという時の心の働きとは、イメージや感じを持つということではない。

だが、上記の引用中のウィトゲンシュタインの想像上の対話者は、例えば命令の場合、命令とその実行の間には溝がある。その溝を埋めるために、理解すること（心的出来事、心の働き）がなければならない、そうでないと、理解は成り立たず、我々は単なる語という記号、インクの線を前にするだけではないか、と言う。

では、語（命令）という記号を理解すること（心的出来事、心の働き）とはどういうものか。ウィトゲンシュタインは言う。

我々は、今や、あの雑把で、それゆえ眼に付く随伴現象の背後に隠れているように見える理解するという心的出来事（*seelischen Vorgang, mental process*）を把握しようとしている。しかし、それはうまくいかない。あるいは、より正しく言えば、それは現実の試みに全く至らないのである。(PI § 153、強調は論者)

さっと捕らえることが困難な現象、すばやくするりと逃げ去って行く現在の経験、あるいはそれに類するものが我々によって記述されるべきである、ということのうちに課題の難しさがあると人が信じてしまう場所、かの哲学の袋小路に行き着くことは、ここでは容易である。(PI § 436)

このようにウィトゲンシュタインは、我々は理解するという心的出来事を把握しようとしても、それはうまくいかない、現実の試みに全く至らない、と言う。そして、ここで哲学の袋小路に行き着くことは容易だと。このことを踏まえてウィトゲンシュタインは、「語

による命令」と、それとは別にその語を理解する「心の働き」というものを考えなくても、語による命令とその実行、というだけでよいのではないか、命令とその実行の間に、命令を理解するという中間段階（心的出来事、心の働き）を置かなくてもよいのではないか、と次のように言う。

「彼は、私が命じたことをなした。」—なぜ人は、ここで、行為と語の一致がある、と  
言うべきではないのか。何のために私は、両者の間に影[理解するという心的出来事、  
心の働き]を置かなければならないのか。(Z § 290、強調はウィトゲンシュタイン)

理解を決して<心的出来事>と考えるな。……

「理解する」という動詞がそこにあるからといって、また人が、理解するということ  
は心の働きである、と言うからといって、我々はある特定の (spezifisch) 心的出来  
事を見つけねばならないと考えるな。(Z § 446、強調はウィトゲンシュタイン)

ウィトゲンシュタインは、理解するという心的出来事を把握しようとしてもうまくいか  
ない、「それは現実の試みに全く至らない」(PI § 153)、と言う。それはなぜだろうか。

その一つの要因は、言語の表現形式の間にある、ある種の類比によって誤解が引き起こ  
されることにある。

このことについて、ウィトゲンシュタインは次のように言う。

それ故我々の考察は文法的な考察である。そしてこの考察は、それが誤解を取り除く  
ことによって我々の問題に光を投げかける。その誤解は、語の使用に関係していて、  
とりわけ我々の言語の様々な領域における表現形式の間にある、ある種の類比によっ  
て引き起こされる。(PI § 90、強調は論者)<sup>9)</sup>

例えば、「命令を理解する」という表現は、「字を書く」、「歌を歌う」、「リンゴを食べる」  
等と同じように、「……を……する」という表現形式をしている。「字を書く」という時、  
「字」とは別に「書く」という行為がある。「歌を歌う」という時も同様に、「歌」とは別  
に「歌う」という行為がある。こうした類似の表現形式に引きずられて、「……を理解する」

という場合も、「……を書く」、「……を歌う」等と同じように、「……」とは別に「理解する」という特定の心の働きがあると我々は無批判に誤解してしまうのである。「……を……する」という表現形式の偽装表示に惑わされて、「命令」とは別に、それを「理解する」という特定の心の働き、心的出来事があると思ってしまう。そしてその「理解する」という心の働き、心的出来事とはどういうものか、それを把握しようとする。だが当然のことながらそれは「現実の試みに全く至らない」(PI §153)。なぜならそれは、「……を……する」という言語の表現形式の類似性から要請されてくる映像(誤解)でしかないからである。

かくしてウイトゲンシュタインは、「理解する」ことに特定の特徴的な心的出来事があるとは考えるな、と次のように言う。

理解を「特定の」<心的出来事>と決して考えるな！—というのは、それはあなたを混乱させる話し方だから。そうではなくて、次のように自問せよ。どの様な場合に、どの様な状況の下で、我々は、「今や私は[システムの]その先を更に[どう続けるか]知っている。」と言うのか、その公式が念頭に浮かんだ時か、と。

理解ということに「特定の」特徴的な出来事(心的出来事も)があるという意味では、理解は心的出来事ではない。

(痛みが和らいだり、強くなること、あるメロディや文を聞くこと：心的出来事。)(PI §154、強調はウイトゲンシュタイン)

ウイトゲンシュタインがここで、「理解ということに「特定の」特徴的な出来事(心的出来事も)があるという意味では、理解は心的出来事ではない」と言っているのは、理解が心的出来事ではないと言っている訳ではないということに注意する必要がある。痛みやメロディを聞くことには特定の特徴的な心的出来事がある。だが、理解することには特定の特徴的な心的出来事はない、と言っているだけであって、そこには状況に応じた様々な心的出来事があることまでは否定していないのである。

ウイトゲンシュタインは『茶色本』で、我々が語の意味を理解すると言うとき、我々の心に何が起こっているかを知るための実験を提案している。それは、様々な語のリスト(知らない外国語、母国語、日常語、専門用語等からなる語のリスト)を読み上げてもらい、私はその語の一つ一つに理解するかしないかを返事して、私が語を理解した時、理解しな

かった時に、私の心に何が起こったかを思い起こそうとするものである。この結果は次のようなものであった。

この実験は、多くの異なった特徴的な経験（Erfahrungen, experiences）を我々に示すにもかかわらず、我々が理解の経験と呼びたくなるような[特定の特徴的な]経験を一つも示さないということを見出して、我々を驚かせるかもしれない。（BB § 14、強調は論者）<sup>10)</sup>

ウィトゲンシュタインは、この実験を通じて、「理解する」時の特定の特徴的な経験を見付けようとした。だがそこには多くの異なった特徴的な経験はあっても、「我々が理解の経験と呼びたくなるような[特定の特徴的な]経験を一つも示さないということを見出す」と言う。痛みやメロディを聞く時の感覚には、それらに特定の特徴的な心的出来事がある。しかし、理解するという時には、多くの異なった特徴的な経験（心的出来事）はあっても、理解に特定の特徴的な経験というものは見出せなかった。そのため、痛みや感覚に特定の特徴的な心的出来事があるということと同じ意味では、理解することは心的出来事ではない、と言うのである。理解することに「多くの異なった」特徴的な経験はあっても、「特定の」特徴的な経験はない。理解することを心的出来事であると言うとしても、痛みや聴覚等の感覚を心的出来事という場合とでは「心的出来事」の意味が異なっている。このことを混同してはいけない、とウィトゲンシュタインは言うのである。

さて、命令を受けてそれに従うことは、命令を理解するという特定の特徴的な心的出来事、心の働きがあつてのことではない。では命令の理解はいかにして可能なのか。次節でこの問題を取り上げよう。

## 5. 語を理解するということは言語における語の慣用にある

第3節では、命令とその実行の間に命令を理解するという心の働きが必要だ、という考え方が批判された。前節では、理解することに様々な特徴的な経験（心的出来事）はあっても、特定の特徴的な経験（心的出来事）はないことが明らかにされた。命令とその実行の間にある溝を埋めるのに、理解するという特定の特徴的な経験（心的出来事、心の働き）

はない。すると、命令と実行の間にある溝は残されたままである。では、何が命令という語（記号）に生命(意味、為すべき行為)を与えるのか。命令とその実行の間にある溝は何が埋めるのか。それは語（記号）の慣用だ、とウィトゲンシュタインは言う。

あらゆる記号は、それだけでは死んでいるように見える。何がそれに生命を与えるのか。－ [意味を与えるという心の働きではなく、言語における] 慣用 (Gebrauch, use) の中でそれは生きている。それは、その中で生命を持つのか。－それとも慣用がその生命なのか。(PI § 432、強調はウィトゲンシュタイン)

「慣用の中で、それ [語 (記号)] は生きている」という意味は、ある状況下で言語におけるその語の慣用があり、その中で、語(記号)は生命を持つ (意味を持つ)、ということである。

例えば命令 (語 (記号)) は、その命令がなされる状況や文脈を離れて、命令それだけで為すべき行為は導かれず、しかるべき状況下での言語における語の慣用がその生命なのだ、とウィトゲンシュタインは言う。

第3節で取り上げた「庭にある赤い花を取ってこい」という命令を考えてみよう。この命令に従う為には、日本語という言語に通じていることが必要なことは勿論である。しかし、この命令を受けてその命令に従う為には、これだけではまだ十分ではない。他に、様々なことがあらかじめ前提にされていなければならない。即ち、赤い花ならどんな花でもよいのか、取ってはいけない花はないのか、何本取ってくればよいのか、1本だけでよいのか、花の部分だけでよいのか、茎も必要か、どれくらいの長さのものか、根も必要か、取った花は新聞紙等にくるまなければいけないのか、いつ、どこへ持っていけばよいのかといったこと等が分かっているなければならない。

そして、命令の中で、こうしたことをどこまで詳細に規定するかは、それを命令する状況によって決まってくる。庭から花を取ってくるのが日常いつもしていることであれば、細かく言う必要はないだろう。そうでなければ、細かく指示するだろうし、命令を受けた方も、分からないことがあれば、あれこれ聞いて確認するだろう。どこまで詳細に規定して命令するかは、その状況の中で決められる。「花!」というだけで十分こと足りる場合もあるだろう。この場合の「花!」は、莫大な暗黙の前提、事前の了解があって成り立つ命

令である。

ウィトゲンシュタインは、命令の理解は、意図や期待と同様に、状況の中に埋め込まれている、と言う。<sup>11)</sup>

しかし待て！－「今や私はそのシステムを理解している」が、「私は……という式が念頭に浮かんでいる」（あるいは「私はその式を口に出して言う」「私はその式を書き留めている」等）ということと同じことを言っているのではないならば、－そのことから私は、「今や私は……を理解する」とか「今や私は続けることができる」という文を、その式を発話した背後あるいはそれと並んで存在しているある出来事〔「理解する」という特定の特徴的な心的出来事〕の記述として使う、ということが帰結するだろうか。もし、＜式を発話した背後に＞何かが存在していなければならないとしたら、それは－私にその式が念頭に浮かんだ時－私が続けることができると言うことを正当化するようなある種の状況（*gewisse Umstände, particular circumstances*）である。〔「理解する」という特定の特徴的な心的出来事ではない〕（*PI* § 154、強調はウィトゲンシュタイン）

命令の実行は、命令された意味を熟慮してなされることもあるが、何も考えずになされることもある。瞬時に、条件反射的に、更には自動行為のようになされることもある。普段の生活の一コマにあるような「スーパーで豚肉とにんじんを買ってきてくれ」、「電気をつけてくれ」といった指示や命令には、特にそれ以上の意味を考えることはないだろう。

命令とその実行は、具体的な状況の中で、日常の言語的实践の中でなされる。

そして、命令を理解するという事は、命令者の意図通りに命令を実行することである。また命令をした者は、相手がその命令を理解したかどうかを、その行動によって判断する。

もし、私が誰かに命令を与えるとするなら、彼に記号を与えるだけで私には全く十分である。そして、私は、それは単なる言葉だとは決して言わないだろうし、また、私はその言葉の背後に入り込む（*ich muß hinter die Worte dringen, I have got to get behind the words*）のでなければならない。（*PI* § 503、始めの強調はウィトゲンシュタイン、後の強調は論者）

命令は語という記号でなされ、それで十分なのだ。命令を語（記号）とそれを理解する心という 2 段階に区別して考えたいのは、前節で論じたように、「……を……する」という表現形式に惑わされるからだ。例えば、慣れない外国語の文を日本語に翻訳するというような映像に引きずられて誤解するからだ。そして、それだけではなく更に、日本語であっても日本語という記号を理解するという心的出来事、心の働きがなければ、意味がつかめず命令を実行することができないように思われるのだ。しかし、言葉を覚え始めた幼い子供ならともかく、我々は日本語に精通している。だから、日本語の文であれば、まずそのままで十分だ。もちろん、自分に分かりやすい表現（それも日本語）に直すということはあるかもしれない。しかし、変えられたその日本語の文を更に別の何かに変えることは普通しない。仮にあつたとしても、それは別の日本語の文に変えるということで、この連鎖はどこかで終わる。

しかし、オウムや自動機械が日本語（文）を話しても、その文を理解しているとは我々は思わない。それはオウムや自動機械には文を理解するという心の働き(心的出来事)がないからで、それに対して我々には文を理解するという心の働き(心的出来事)がある、と言われるかもしれない。もちろん、日本語の文が理解できるためには、オウムや自動機械と違って、日本語に習熟していることが必要である。

しかし、これまでにみてきたように、「理解する」ことに特定の特徴的な心的出来事、心の働きというものはなかった。オウムや自動機械にはない特定の心的な何かが伴っている、ということではなかった。では、語（記号）を理解する、語に意味（生命）を与えるものは何か。

命令とその実行の間には常に溝がある。これまで論じてきたことを進めていくと、その溝を埋めるものは心の働き(理解するという心的出来事)ではない。かといってその溝は解釈を連ねることで埋められるような地続きにはなっていない。では何がその溝を埋めるのか。それは状況であり、言語における語の慣用である。しかるべき状況の中で、言語における語の慣用によってその溝が跳躍される。慣用という跳躍によって命令と実行が結び付けられる。ここには、規則とその規則に従うこととの間にあるのと同じ構造がある。規則とその規則に従うこととの間には溝がある。その溝は解釈を重ねることで埋められない。それは慣用(訓練)という跳躍によって超えられる。

私は次のように尋ねたい。規則の表現—例えば道標—は、私の行為とどう関わっているのか。そこにどのような結びつきがあるのか、と。—おそらく次のことだろう。私はこの記号に一定の反応をするように訓練されている。だから今度も私はそのように反応する。(PI § 198)

ある規則に従う、ある報告をする、ある命令を与える、チェスをするということは、慣習（慣用、制度）である。文を理解することは、言語を理解することである。言語を理解することは、[言語使用の] 技術に精通することである。(PI § 199、強調はウイトゲンシュタイン)

語の意味 (Bedeutung, meaning) とは、言語におけるその慣用である。(PI § 43)

語（記号）に意味（生命）を与えるのは言語、即ち共同体における語の慣用である。

言語における語の慣用は、共同体の中での教育、訓練によってその仕方が学ばれる。その仕方を学ぶというのは、言語使用の技術に精通することである。

そして、言語使用の技術に精通することは、「適切な判断を学ぶ」(PI vi) <sup>12)</sup> ことである。そしてこの技術に通じることによって、「言葉の背後に入り込む」(PI § 503) ことができるようになる。即ち、共同体での言語による生活を通して、ある状況下で発話された言葉は、その言葉の文字通りの意味だけでなく、発話された状況下で、その言葉の背後にあるもの、その意味が理解される。例えば「雨が降ってきた」と誰かが言ったとしよう。これは文字どおりの意味を表わす場合もあるが、状況によっては「外出するには傘がいるよ」とか「洗濯物を早く取り込んで」とか「今日は庭木の水遣りをしなくていいね」等を意味するものとして理解される。

更にまた我々は、共同体での言語による生活を通じて、無数の前提を、意識的にあるいは特に意識することもなく、背景知として、またその一部を思考や認識、判断（言語ゲーム）の枠組み <sup>13)</sup> として身につけていく。

このようにして我々は、言語使用の技術に精通することで、単に発話された言葉だけでなく、背景知とともに、発話された状況を踏まえて、その言葉の背後にある意味を理解す

る（「言葉の背後に入り込む」(PI § 503)）。これが言語における語の慣用の効果であり、オウムや自動機械と異なるところである。

ある発話（語）を理解すると言う時、そこには様々な経験（心的出来事）がある。だが、そこには痛みや感覚にあるような特定の特徴的な心的出来事はない。その意味で、理解するというのは心の働きではない。理解するということは、様々な心的出来事を伴った、しかなるべき状況下での言語における語の慣用なのだ。状況が変われば同じ発話（語）でも理解される意味が変わる。これが、ウィトゲンシュタインが「慣用の中でそれ [記号 (語)] は生きている」(PI § 432) と言う意味である。

このように「ある語を理解する」という句によって我々が指すのは、必ずしも我々がそう話したり聞いたりしている間に起っていること [特定の特征的な心的出来事] ではなく、その語を言うという出来事の [背景知を含めた] 全環境である。そして、このことはまた、誰かが自動機械のようにあるいはオウムのように語る、と我々が言う場合にも当てはまる。理解を持って話すことは、自動機械のように話すこととは当然違っている。しかしこのことは、前者の場合に話すことが、後者の場合にはない何か [特定の特征的な心的出来事] が始終伴っているということ、意味しない。(BB § 14) 14)

……言葉の意味はその使用法 (Art seiner Verwendung) である。

なぜなら、その使用法は、その言葉が我々の言語に初めて組み込まれるときに我々が習得するものだからである。(OC § 61)

「今日は何時頃に帰る？」「7 時過ぎかな。」等の会話は人と人との間では成り立つが、人とオウムや自動機械の間では成り立たない。人と人との間では、当事者に直接意識されている訳ではないが、その会話が行われている状況についての認識と無数にある前提を背景にして、ごく自然に会話は進んでいく。そのやり取りは自動化されているかのようにさえ見える。しかし、これは言語使用の技術や状況についての認識、背景知を持たないオウムや自動機械との間では成り立たないことだ。

さて、命令を理解することに特定の特徴的な心的出来事がないとしても、理解しているという心の持続した状態がないと命令果たすことはできないのではないか、理解しているというのは、理解しているという心の持続した状態ではないか、と考えたくなる。次に、命令を理解するということがある種の心の状態だということについて取り上げよう。

## 6. 理解するということがある種の心の状態である

ウィトゲンシュタインは、心の状態を、本物の持続を持つものとそうでないものとに区別する。例えば、五感の感覚や痛みとか悲しみは、本物の持続を持つ心の状態である。そして、「心の状態」と言う時、こうした本物の持続を持つものとそうでないものを混同してはならない、という。

「ある語を理解する」、一つの状態。しかし、ある心の状態なのか。

—悲しみ、興奮、痛み、を我々は心の状態という。次の文法上の考察をしたまえ。

我々は言う、

「彼は一日中悲しんでいた。」

「彼は一日中ひどく興奮していた。」

「彼は昨日から間断なく痛みがあった。」

我々は「私は昨日からこの語を理解している」とも言う。しかし「間断なしに」か。

—むろん、人は理解の中断について語るができる。しかし、どんな場合にだろうか。「いつ君の痛みが和らいだのか」と「いつ君はその語を理解しなくなったのか」とを比較してみよ。(PI § 149 脚注(a)、強調はウィトゲンシュタイン)

いつから痛みが和らいだかを言うことはやさしい。だが、いつからある語を理解しなくなったかを言うことは難しい。

さて、理解することを持続する心の状態だと考えたくなるのは、次のようなことからだ。例えば、ある命令を受けてその命令を実行するのは、命令を受けた後のことだ、だから、その命令を理解した時の心の状態が命令を果たす時まで続いていないと命令を果たすことができないのではないか、と考えるのである。

「庭にある赤い花を取ってこい」という命令を受ける。命令を受けた者は、命令された花を命令者のところに持っていくまで、その命令を理解した時の状態がずっと続いているのでなければ命令を果たすことができない、だから、理解するということは、理解した時の心の状態をずっと持ち続けているのでなければならない、と考えるのである。

このことは、言葉の理解でも同じだ。ある言葉の意味を理解しても、その理解した時の心の状態がずっと続いているのでなければ、その言葉を適切に使うことができない、だから言葉を理解するというのは理解した時の心の状態が続いていることだ、と考えるのである。

しかし、ここでいう命令や言葉の意味を理解しているという時の心の状態は、痛みや感覚、感情が続いているという時の心の状態とは「状態」の意味が異なっている、とウィトゲンシュタインは言う。例えば、「歯痛はいつから始まったのか」、「痛みはずっと続いていたか」、「いつ痛みがなくなったか」、「どの程度痛いのか」、と聞くことには意味があるし、歯医者への問いに答えることもできる。

しかし、命令を理解してその命令に従うという場合はどうだろう。命令の意味は、命令されたその時に理解した。ではその理解した時の心の状態を、命令を実行する時まで、ずっと痛みのように中断無く持ち続けているだろうか。例えば「明日の朝、庭にある赤い花を取ってこい」という命令があったとしよう。次の日の朝になるまでその命令を受けた(理解した)時の心の状態がずっと維持されているだろうか。その命令をずっと中断なく内語し続けているわけではない。夜寝ている間も意識されていたとは思えない。また、命令によってはそれを果たすのに、数日、時には数ヶ月、間があくことがあるかもしれない。その場合、その数日間、数ヶ月間、ずっと、痛みを持ち続けるように、それこそ中断無く、命令を理解した時の状態を持ち続けている、といえるのだろうか。ある意味ではそうだと言えそうに思われる。でなければ命令を果たすことなどできないだろうから。しかし、痛みが持続するように理解した時の心の状態を持続して持っているわけではない。かといって、命令を果たすまでの間、命令を理解した時の状態が一時的にでも無くなるということでもない。命令を理解した時の状態が無くなるということは、命令に対して自分が何をすべきかが分からなくなる、ということだから。

なお、命令されて命令それ自体を忘れるということはある。その場合はその命令によって何を為すべきなのかということ(理解した内容)も忘れていく。だが命令されたことが

無くなるわけではないので、命令されたことを思い出せばそれを果たすことができる。これに対して歯痛を忘れることはない。歯痛を忘れるということは、歯痛が無くなることだから。

このように、理解するという時の「心の状態」は、痛みや感覚、感情という時の「心の状態」とは違っている。理解するという時の心の状態は、感覚や感情のような本物の持続を持たない。本物の持続を持つ感覚や感情は、それがいつ始まっていつ終わったかということは明確だし、その強弱もある<sup>15)</sup>。注意の移動や眠りなどによって中断されることもある<sup>16)</sup>。これに対して理解しているという状態は、理解しなくなった場合、それがいつから理解しなくなったかが不明で、注意の移動や眠りによって中断されることがない<sup>17)</sup>。理解は感覚や感情のような本物の持続を持たない。

ウィトゲンシュタインは、本物の持続を持つものとそうでないものとを区別して、感覚や感情のような本物の持続を持つものを心の状態と呼ぶ。これに対して理解するという時の心の状態をウィトゲンシュタインは「心的傾性 (seelische Disposition)」<sup>18)</sup>と呼んで、感覚や感情のような本物の持続を持つ心の状態と区別した。

最後に、理解するとはどのようなことかについてまとめよう。

## 7. 理解するとはどのようなことか

これまでの議論を整理すると次のようになる。

理解することに、特定の特徴的な心的出来事、心の働きというものはない。発話(語)を理解するということは、しかるべき状況下での言語における語の慣用による。また、理解するという時の心の状態はウィトゲンシュタインが心的傾性と呼ぶものであって、痛みや感覚、感情のような本物の持続を持たない。

さて、ある文を理解して読む時と、理解せずに読む時とでは違いがあるのではないか、と言われるかもしれない。もちろんそこには大きな違いがある。また、ある詩は私を感動させるが別の詩は私を感動させない、この違いは詩を理解しているか理解していないかに起因するのではないか、と言われるかもしれない。もちろん、詩を理解して読む時と理解しないで読むときとは、得られる感動は異なるだろう。また、命令は、その内容が理解されていなければ実行されることはない。

文（詩）であれ命令であれ、それがなされる語（記号）に意味（生命）を与える（理解する）のは、先に論じたように、しかるべき状況下での言語における語の慣用である。語の慣用は、共同体の中で言語を通じた教育、訓練によってその仕方が学ばれる。その仕方を学ぶということは、我々にとっては日本語に習熟することであり、言語使用の技術に精通し、様々な言語ゲームに通じていくことである。そして無数の知識を背景知として、またそれらの一部を思考や認識、判断（言語ゲーム）の枠組みとして身に付けていく、ということである。

「だが、それを読んでいる間、君は楽しまなかったのか。」もちろん楽しんだ。－というのも、それと反対の答えは、私がそれを以前に楽しんだとか後になって楽しんだことを意味するであろうし、私はそのように言いたくないからである。しかし君は今、読んでいる際にあつたある種の感覚や表象や思考を思い出す。そして、正確に言えば、それらは楽しみや印象にとって取るに足りないようなものではなかった。－しかし、それらは、その正当性（*Richtigkeit, correctness*）を、それを取りまく周囲にあるものによってのみ、即ち言語や韻律や無数のその他の物事についての私の知識を通じて詩を読むことによってのみ、得るのだ、と私は言いたい。（*RPP2* § 501、強調はウィトゲンシュタイン）

詩を読む時、私は様々な感覚や表象や思考（心的出来事）を持つ。それらの背景には無数の物事についての私の知識があり、それを通じてのみ当該詩の楽しみや理解の正当性を得る、とウィトゲンシュタインは言っている。

詩や文芸作品を読んで理解するということは、作者の個人的な事情や環境、彼の生きた時代の政治、社会、文化的な状況等についての私の知識を始めとして、私自身の経験にも依存する。私の知識が広ければ広いほど、深ければ深いほど、楽しみや味わいが増す。また私が、成功体験や失敗、挫折、失恋、親しかった人を亡くす等の経験を重ねるほど理解の程度は変化し、深くなる。学生時代に読んだ小説を読み返して、かつては気にもとめなかったか所が今になって重要に思われることがある。また、最初はさっぱり分からなかった本でも、何度も繰り返して読んでいくうちにおぼろげに著者の考えや主張が分かってくることもある。

思考と生活の流れにおいてのみ、語は意味を持つ。(Z §173)

かくして我々が語（言葉）の意味を理解するということは、置かれた状況についての認識と言語における語の慣用の中で、我々の思考と生活の流れの中で、様々な知識や経験を背景にしてなされる。物事についての我々の知識や経験が多くなればなるほど、また深くなればなるほど語（言葉）についての理解は変わり、見える風景も変わってくる。

このように我々は、言語使用の技術に精通し、状況についての認識とともに、これまでに得た無数の知識や経験を背景知として、またそれらの一部を思考や認識、判断（言語ゲーム）の枠組みとして身に付けていく。それらは心の状態としては心的傾性といわれるもので、我々の構え（態度）の内であって、我々の語（言葉）への理解を深めていくものである。

#### 【註】

- 1) 暗号文を理解する、ある命令を理解して実践する、語や文の意味を理解する、楽曲を理解する等
- 2) *process* は日本語訳では「過程」と訳されていることが多い。『探究』では *Vorgang*（独）の英訳として *process* が使われているが、*Vorgang* には「出来事」の意味があることから本稿では「出来事」と訳すことに統一した。
- 3) 邦訳『青色本』 p.25
- 4) 邦訳『青色本』 p.25
- 5) *BB* pp.78—9、邦訳『茶色本』 pp.135—6
- 6) p.155
- 7) ウィトゲンシュタインは「赤い切れを想像してみよ」という例で同様の批判をしている。*BB* p.3、邦訳『青色本』 p.24
- 8) *BB* p.3、邦訳『青色本』 pp.24-5
- 9) 同様のことは *PI* § 94,109,111,116,132 等でも言われている。
- 10) *BB* 邦訳 p.156
- 11) 「意図は状況の中に、人間の慣習と制度の中に埋め込まれている」(*PI* § 337)、「期待は状況の中に埋め込まれて」(*PI* § 581)いる。

12) *PI* p.193

13) 言語ゲームの枠組みについては *On Certainty*, 邦訳『確実性の問題』の中で論じられている。

14) *BB* 『茶色本』 p.157

15) *RPP2* § 63

16) *Z* § 81

17) *RPP2* § 45

18) *RPP2* § 178

### 【参考文献及び略号】

Wittgenstein, Ludwig, *The Blue and Brown Books*, 1972, Basil Blackwell Oxford, 2nd edn.1969、略

号『*BB*』（邦訳『青色本』、『茶色本』ウイットゲンシュタイン全集 6、大修館書店、1975）

\_\_\_\_\_, *Philosophical Investigation*, Trans. G.E.M. Anscombe, 2007, Basil Blackwell, 3rd edn.2001、

略号『*PI*』（邦訳『哲学探究』ウイットゲンシュタイン全集 8、大修館書店、1976）

\_\_\_\_\_, *ZETTEL*, Edited by G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright, Trans. G.E.M. Anscombe, 2nd

edn.1981, Basil Blackwell,1975、略号『*Z*』（邦訳『断片』ウイットゲンシュタイン全集 9、大修館書店、1975）

\_\_\_\_\_, *On Certainty*, Edited by G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright, Translated by Denis Paul and

G.E.M. Anscombe. Basil Blackwell Oxford, 1979、略号『*OC*』（邦訳『確実性の問題』ウイットゲンシュタイン全集 9、大修館書店、1975）

\_\_\_\_\_, *Remarks on the Philosophy of Psychology, vol I* G.E.M. Anscombe and G.H.Von Wright (eds).

Trans.G.E.M. Anscombe Basil Blackwell, 1980、略号『*RPP1*』（邦訳『心理学の哲学 1』、ウイットゲンシュタイン全集 補巻 1、大修館書店 1985）

\_\_\_\_\_, *Remarks on the Philosophy of Psychology, vol II* G.H.Von Wright and Heikki Nyman (eds).

Trans.C.G.Luckhardt and M.A.E.Aue Basil Blackwell, 1980 , 略号『*RPP2*』（邦訳『心理学の哲学 2』、ウイットゲンシュタイン全集 補巻 2、大修館書店 1988）

なお、本稿中、引用文は邦訳を参考にして論者が訳した。